



＊第35回＊ 高柳由美子

NHK

リケジョ，いえ， 理系の女として

“理系の女”

思い返せば、小学生の頃から理系でした。算数や理科が好き、というより、国語が苦手、という消去法の理系。最初のつまづきは、テストの読解問題でした。「このときの太郎くんの気持ちを答えなさい」という問いに、4つの選択肢があります。2つはどう考えても違う、でも残りの2つはあり得る、で、迷った挙句に選んだ方が大概外れます。そうすると、私の選んだ答えは絶対違うの？太郎くん（おそらく実在しない）に聞いたの？と考えてしまい、どうにも納得できないのです。その点、算数や理科の答えは、根拠がはっきりしているの、疑いようがありません。国語だけでなく、社会も苦手でした。暗記ができないのです。特にカタカナが苦手で、世界史・地理のテストの点数はひどいものでした。

さて、表題の“理系の女”ですが、これは、同じく理系女子の友人が同級生に言われた言葉です。その同級生は、「怒らないでね」と前置きをしてこう言ったそうです。「この世の中には、3種類の間がある。男と女と理系の女」それを聞いた私は、怒るところか、うまいこというな、と感心してしまいました。不思議なことに、この話をして怒る理系女子は、私の周りには一人もいません。理系の女は理系の女であることをけっこう気に入っているのか

もしれません。最近耳にする“リケジョ”という言葉は、2010年頃使われるようになったそうです。昭和生まれの私は、“リケジョ”ではなく“理系の女”なのです。

就職まで

文系科目が苦手だった私は、高校3年生の進路選択で、迷わず理系クラスを選びました。私の通っていた公立高校は、元々旧制女子高校だったこともあり、男子より女子の方が生徒数が多く、理系クラスでも50人中女子が20人いました。それでも、文系クラスの友だちが私の教室に遊びに来て、「この教室、男くさ～い！」と言っていたので、やはり理系＝男子という印象がありました。大学進学も、もちろん理系の学部を目指して勉強しました。受験勉強は楽しかったです。中でも物理の問題集を解くのが楽しくて、最初に物理の勉強から始めるとずっと物理をやってしまうので、他の科目を先に勉強するようにしていました。この科目が終わったら、物理の問題集が解ける♪と楽しみにしながら。

大学に入学すると、さすがに男子が圧倒的多数で、私の進んだ電気工学科では、女子の割合は5%程度でした。他の方も書いていたように、女子トイレが別棟の校舎にしかない、という不便もありましたが、数が少なかった分、女子同士とても仲良くなりました。普段は年賀状のやりとり程度ですが、大学卒業25年を機に開催された「リケジョ同窓会」では、お互い全然変わっ



25年以上前の“女子大生”（左下が筆者）

てないね～などと言いながら、大いに盛り上がりました。

就職は、いわゆるバブル期だったので、わがまま言わなければどこでも入れるという感覚でした。男女雇用機会均等法が制定されて数年後だったこともあり、理系の女子は企業から大人気でした。今では信じられない話ですが、3泊4日の就職活動旅行も、会社見学の後、人生で初めて食べた高級中華フルコースも、ピアノ生演奏のある銀座のバーも、すべて企業の“接待”でした。そんな中、一切勧誘のなかったNHKに就職しました。志望理由はいい加減なものです。学校に張ってあった“推薦先企業一覧”を見ていたらNHKがあって、テレビが好きだからNHKにしよう、それだけでした。どんな業務があるかもほとんど知らず、試験を受けて合格、入局が決まりました。仕事が合わなかったら転職すればいい、なんてたって“売り手市場”なんだから、とどこかで思っていました。

† NHK
"As A 'Woman in the Sciences'" by Yumiko Takayanagi (NHK, Yokohama)



NHK入局後

雇用機会均等法が制定されたとは言え、まだまだ女性採用は少なく、技術職では私たちが4期目でした。その頃は、いい意味でも悪い意味でも、多少の差別（区別？）はあったように思います。先輩は、アクセサリーを着けているだけでキャラキャラしていると注意されたと言っていましたし、同期が何人かいても私だけワープロ打ちを頼まれたこともありましたが（当時は、おじさま方がパソコンを使えず、手書きの文書をワープロ打ちするというニーズがよくありました）。あとは、女子というだけで英語ができる、という妙な誤解もありました。その代わりと言って

は何ですが、飲みに行けば、「いいよ、いいよ、女の子は」と、だいたいご馳走になっていました。トータルでは、プラマイゼロ、というよりプラスだったのではないのでしょうか。かわいがっていただいたし、大目にもてもらった部分も多かったように思います。そうそう、就職したころ抱いていた、いつでも転職できるという甘い考えは、バブル崩壊後に訪れた就職氷河期を目のあたりにして、もろくも崩れ去ったのでした。

NHKは転勤職場です。例外的な職場もありますが、3～5年で、違う職場に異動するのが通例です。私の最初の転勤先は、仙台放送局でした。父が転勤族だったこともあり、転勤に何の抵抗

もありませんでしたが、友人たちには「女の子も転勤するの？」と驚かれました。仙台局では、本当に多くの経験ができました。専門性重視の東京と違って、地方の放送局では少ない人数で幅広い業務を行います。スポーツ中継や音楽番組の撮影など、希望していた番組制作業務に携われて毎日楽しく過ごしました。ヘリコプタにも乗りました。上空から見た仙台の冬の風物詩“光のページェント”は今も目に焼きついています。生涯の友と呼べる友人（やはり理系女子）にも出会えたし、本当に仙台に転勤して良かったと思っています。

TD

仙台で5年を過ごし、次の異動時期になりました。東京で番組制作をやりたいけど、大した専門技術力もなかった私は、希望者がほとんどいないTD（Technical Director：テクニカルディレクター）グループに異動になりました。技術スタッフのまとめ役とも言えるTDは年配の方がやるものという構図が定着していましたが、徐々に若手のTDが増え始めた時期でした。そんなわけで、女性TDはまだ誰もおらず、おもしろいからやらせてみようか、ということになったそうです（後々、仙台時代の上司から聞きました）。当然ですが、最初は苦労の連続でした。NHKにはたくさんのスタジオがあり、スタジオ毎に設備も違います。迷子になりそうになりながらスタジオに行くと、映像モニタの調子が悪いと言われても、関係する設備がどこにあるかわからず、オロオロ…。そこでも、ずいぶんと助けてもらいました。普段は自分の仕事以外には一切手出し・口出しをしないのに、映像モニタの後ろでいろいろ調べてくれた音声の大先輩や、私のせいで収録の開始が遅くなっている（俗に言う、押している）のに、文句も言わず「ゆっくりやっついていいよ～」と待ってくれたプロデューサー（当時すでにおじいちゃん）、感謝しています。その後、職場の先輩方にも支えられ、なんとか一人前になり、関連団体への



仙台局勤務時代：野球中継撮影



仙台局勤務時代：雪山訓練（後から3番目が筆者）



番組制作の様子(手前が筆者)

出向期間も含めると12年にわたってTDとして活躍(!?)することができました。自分の年齢を考えると、これ以上長く同じ業務に携わることはなさそうなので、私にとってTDは「天職」ということになっておこうと思います。番組制作の現場は、例え同じ番組でも内容や出演者、スタッフが毎回違うので、新鮮な気持ちで向き合える、難しくもやりがいのある仕事でした。

女性TDも今ではずいぶん増えましたが、私がTDになった当初から、女性だからと言って仕事がやりにくいということはありませんでした。NHKでは、技術部門よりも早い時期から、女性記者や女性ディレクターが活躍していたため、一緒に仕事をする人たちも免疫ができていたのでしょう。他部署の人から珍しがられることもあまりありませんでした。唯一、特別扱いと言えば、“女性スタッフで作る番組”なるものを制作したことがあります。TDは私で、撮影、音声、照明、VE (Video Engineer) チーフも全員女性がかき集められました。視聴ターゲットも女性なので女性のセンスで、という理由付けはありましたが、男性カメラマンでもお洒落な映像を撮る人はいる

し、正直、あまり関係なくて、話題作りだったように思います。差別だ! などとみんな文句を言っていました。仕事の間のおしゃべりも含め、楽しく仕事をしたのを覚えています。番組が終わった後、技術部門の偉い方が私たちを会議室に集め、女性スタッフならではの良かった点を挙げてほしい、と言われましたが、何も出ず、がっかりされていたのを思い出します。

ちなみに、TDはテクニカルディレクターの略ですが、NHKでは「ティーディー」ではなく「テーデー」と発音します。これは、昔も今も変わりません。

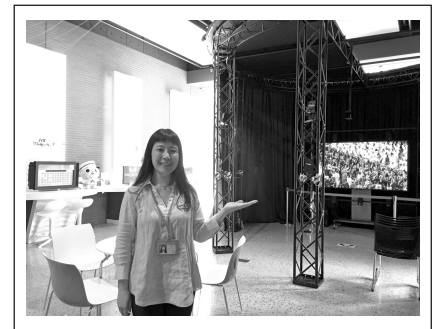
現在

TDの後いくつかの業務経験を経て、今は横浜放送局で技術部長をしています。またまた、放送局の女性技術部長は初めてということで、注目されるからね、と散々言われましたが、いざやってみると、特に注目されることなく、ふつうにやっています。これも、多くの前例を作ってくださった女性職員の先輩方のおかげだと思っています。仕事は、1年目ということもあり、まだまだ手探り状態な部分もあります(部内のみなさん、ごめんなさい!)

2年目、3年目はもう少しうまくやれそうです。

これまで、男だ女だとか関係ない、みんな一人なんだから、と思ってやってきましたが、こうして振り返ってみると、理系女子ということで、数々のチャンスに恵まれてきたのかもしれない。ま、それも含めて私という一人なのですが、これを読んでいるリケジョのみなさんも、それぞれの個性を発揮して、素敵な人生を送っていただけたらと思います。

最後に、生まれ変わるとしたら、男じゃなくて女に生まれたいと常々思っていました。今は、また“理系の女”に生まれてもいいかな、と少しだけ思っています。(2017年3月31日受付)

NHK 横浜放送局ロビーにて
スーパーハイビジョン試験放送受信公開中